

# 水辺の 環境



## ブッポウソウ

ブッポウソウ目ブッポウソウ科 *Eurystomus orientalis* 仏法僧

**全** 長はハトより少し小さく、光に映える青緑～藍色の体に、赤いくちばしと翼にある白斑が目立ちます。見た目が鮮やかなこの鳥は、本州、四国、九州に夏鳥として渡来し、比較的低山の森林で見られますが、個体数は非常に少なく、環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧IB類に指定されています。5~7月頃に見られる繁殖活動は局地的で、天然記念物に指定されている繁殖地もあります。

雛が生まれると、親鳥は餌として主に昆虫を与えますが、その際、貝殻やガラス、瀬戸物、空き缶の栓(プルタブ)など餌とは考えられない固いものも与えます。雛はこれらを飲み込むことによって、昆虫の固い殻などを体内ですり潰すための「碾き臼」として利用し、消化を助けているようです(その後、未消化物と一緒に吐き出されます)。また、これらの物が、親鳥には求愛の道具として使われている可能性もわかりました。

今から約1000年も前の文献にも記載が見られ、鳥類の中でも幾分変わった名前と思われませんが、その昔、「ブッ、ポー、ソー」という鳴き声が聞こえた時に姿を現したのがこの鳥で、『ブッポウソウ』という名前はこの鳴き声から付けられました。また、その声は寺社の境内でもよく聞かれ、場所柄「仏・法・僧」の三宝とも当てはめられることから、霊鳥としても崇められていました。しかし、実際に鳴いていたのはフクロウの仲間であるコノハズクでした。この誤解が正式に認められたのが1935年。当時、ブッポウソウの鳴き声問題はいくつかの新聞にも掲載されており、人々の興味を惹いていたようです。本当の鳴き声は「ゲゲツ、ゲゲツ」という濁った声で、以来、この鳥を「姿のブッポウソウ」、コノハズクを「声のブッポウソウ」と呼ぶこともあります。

社寺林のような昔ながらの生息環境が失われつつある中で、一部では橋梁のすき間や電柱にあげられた穴などでも営巣が確認されており、渡来が確認される地域では、巣箱による保護策もとられています。

写真：益子理氏(いであ(株))、中村浩志氏(信州大学教授) 提供

参考文献：アウトドアガイドシリーズ「野鳥観察図鑑 バードウォッチング大百科」 松田道生 地球丸 1999年  
山溪カラー名鑑「日本の野鳥」 浜口哲一ほか 山と溪谷社 1985年  
「佛法僧問題の終結」 黒田長禮 『鳥』 9巻41号:68-80 1935年  
ネイチャー・ストーリーズ「甦れ、ブッポウソウ」 中村浩志 山と溪谷社 2004年  
「なぜブッポウソウ *Eurystomus orientalis* は巣に奇妙なものを運ぶのか」 中村浩志、田畑孝宏 日本鳥学会誌 36:137-152,1988年  
「ブッポウソウの雛の食物」 中村浩志、田畑孝宏 日本鳥学会誌 38:131-139,1990年  
環境省自然環境局 生物多様性センター インターネット自然研究所ホームページ